

保育者養成校で学ぶ学生のもつ保育観に関する研究 —取得資格による比較より—

佐 藤 智 恵¹

A study on the child-caring belief of the students in early childhood education course

Chie SATO¹

Abstract : In this research, questionnaire form surveys were conducted in order to discuss how the students studying at a childcare training school child-caring belief. In order to further clarify how the students, who would like to obtain “kindergarten teacher's license and childcare certificate” and become childcare worker, view childcare, the similar survey was conducted also with those following a course for obtaining “kindergarten teacher's license and elementary school teacher's license”, and thereby factorial structures were revealed for each course. As a result, it was considered that the students taking the course to obtain “kindergarten teacher's license and childcare certificate” have the belief of childcare such as (1) Would like children to be honest and positive, (2) Understanding in nursing, and (3) Would like to have outcomes of childcare.

Key Words : child-caring belief, students in early childhood education course, questionnaire research

目 的

保育者養成校で学ぶ学生は、どのような保育観を持っているのだろうか。これまで、学生の保育観を考える際、実習の経験による変容という視点から明らかにされているものが多い。松永ら(2002)は、学生らは実習前には「かわいい」「母親がわり」など情緒的で理想化された保育士観や子ども観を持っているものが多いが、実習後には「個性」「有能性」というようにイメージを変化させたことを報告している。松永らの研究は、保育者効力感という側面から実習前後の変容を検討しているが、保育者養成校学生の「保育観」を扱った研究においては、保育者効力感に焦点をあてたものが多い。保育者効力感とは、三木・桜井(1998)により、「保育現場において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができる信念」と定義をされている。

三木・桜井(1998)は、実習での経験が学生の保育者効力感にどのような影響を及ぼすかについて質問紙による調査を行い、実習経験が学生の保育者としての自信を高めていることを明らかにした。一方、中村(2006)は、実習経験が保育者効力感を高めるという効果は見いだせなかった事を述べている。また、堀(2006)は、保育者効力感の高い群と低い群では、「子ども観」、「保育者観」を表わす言葉に違いがあったことを報告している。

一方、現職保育者の保育観や子ども観、保育者のBelief¹⁾などについての研究は、1980年～90年代にかけて幾つか行われている(赤塚ら1981, 森ら1985, 森ら1986, 藤崎ら1985・藤崎ら1986, 邨橋ら1989, 中1996)。その多くは質問紙法により調査された。森ら(1986)は経験年数と保育への意欲・指導タイプと保育者のBeliefの関係について、邨橋ら(1989)は幼稚園教諭用の保育観尺度を作成し、教諭のもつ保育観について、保育者の支配的態度、生活態

1 神戸親和女子大学

度・秩序の管理・強制、子どもの主体的行動の容認などの6因子を抽出した。佐藤・七木田(2007)は幼稚園教諭104名を対象として、5件法によるアンケート調査を行った。アンケート項目は、河村(1995)が小学校教諭のBeliefを明らかにした「教師特有のBelief尺度」を幼稚園教諭用に修正を行い作成した。その結果、幼稚園教諭は保育職に就いていることへの喜びややりがいを感じているもの、担任クラスの幼児に強い責任を感じているもの、よりよい保育方法を身につけることを重要と考えているものが多いことが明らかになった。また河村(1995)の小学校教諭特有のBeliefと比較をした結果、幼稚園教諭特有のBeliefと小学校教諭のそれは、ほぼ一致していたが異なる点として、幼稚園教諭の回答には「～でなければならない」というイラショナル・ピリフが含まれていないことが明らかになった。また、取得資格と幼稚園教諭のBeliefには、その取得資格により異なる特徴が見られた。幼稚園教員免許に併せて保育士資格を持つものは、「明るく元気な子ども」との間に「信頼感」を持つことを大切だと考えているのに対し、幼稚園教員免許に併せて小学校教員免許を持つものは子どもに「指導を素直に聞く態度」を求め、「指導書を参考」にして継続的に保育を進めることを大切だとしていた。

現職保育者の保育観については、保育者効力感以外の視点からも明らかにされている。それは、保育実践には様々な事象が複雑に存在しており、子どもの「望ましい変化」を考えるだけでは保育が立ち行かないという現実があり、これは保育者効力感という側面から保育観を明らかにする際の限界であると考えられる。このことは、保育者養成校で学ぶ学生についても、同様のことが言え、学生にも保育者効力感では明らかにすることが困難な「保育観」も存在するのではないかと。保育者へとになっていく学生の「保育観」を多面的に検討することは、保育者養成において意義あることであり、保育者効力感以外の側面からも考える必要があると思われる。また、学生においても取得資格免許による保育観の違いの有無や保育者を目指す学生の独自性があることが考えられる。この独自性を明らかにすることは今後の保育者研究においても必要な知見となるとと思われる。

そこで、本研究では、佐藤・七木田(2007)で明らかになった取得資格免許による保育観の差に着目し、学生が目指す資格という観点から、

取得希望資格免許によって保育観に有無があるのか、或いは、どのような違いがあるのかを明らかにすることを目的とする。

方法

(1) アンケートの作成

アンケートは、佐藤・七木田(2007)の幼稚園教諭用の保育観尺度を元に作成した。具体的な作成方法としては、まず、幼稚園教諭用の5件法による質問紙を用い、20XX年12月に全学年30名ずつを対象に予備調査を行った。その結果、アンケート項目数が68項目と多いことや、類似している項目があることで、実践経験の少ない大学生にとっては回答しにくい側面があると思われる。そこで、予備調査で得られた結果に因子分析を行い「大学生の持つ保育観」をはかるための38項目からなる新たな尺度を作成した(表1)。また、調査は無記名で実施し、フェイスシートとして「将来就きたい職業」の質問項目も設けた。

(2) 対象者と依頼方法

対象者は、A大学B学科で学ぶ2年次生187名である。A大学B学科では、「幼稚園教員免許と保育士資格」が取得できる「幼保コース」と「幼稚園教員免許と小学校教員免許」を取得できる「幼小コース」がある。2年次より「幼保コース」と「幼小コース」にコース分けを行い、専門的な教科について学び始める²⁾。

今回の調査においては、「幼保コース」の学生96名、「幼小コース」の学生91名に対して、それぞれ20XX+1年の11月の講義時間中にアンケートの依頼を行い、記入できる時間を十分設けた後回収を行った。回収率は100%であった。なお、調査時点において、「幼保コース」の学生は、保育実習I(保育所・児童福祉施設でそれぞれ2週間ずつ)を、「幼小コース」の学生は5日間の幼稚園観察実習をそれぞれ経験している。本研究において2年次生の11月に調査を実施した理由としては、学生にとっては2年次でのそれぞれの実習が初めて本格的に保育実践に触れる機会であり、それまで机上の学習から形成されていた自己の保育観が、実践に触れることにより、イメージだけでなく実感を伴うものとなることが考えられたからである。また、2年次という下位学年であることから、大学における学習や実習などの経験により卒業までに今後も保育観を変容させていくことが予想できるが、本研究においては、初めて実践に触れた

状態の保育観に焦点を当てるものとする。

結果

(1) 回答者が将来就きたい職業

1) 幼保コース

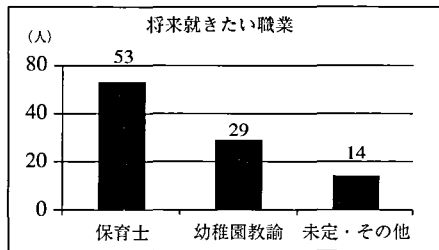


図1 幼保コースの学生が将来就きたい職業

回答者が就きたい職業として「幼保コース」の学生では53名が保育士、29名が幼稚園教諭と96名中の殆どのが乳幼児に関係する職業に就くことを希望していた。その他としては事務員など一般職が挙げられた。

2) 幼小コース

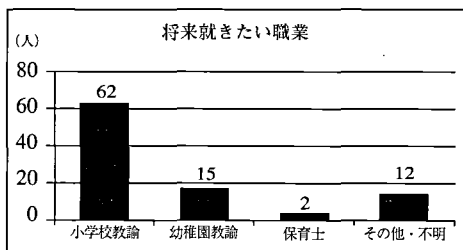


図2 幼小コースの学生が将来就きたい職業

「幼小コース」では、小学校教諭を希望する者が62名と圧倒的に多かった。幼稚園教諭希望者は15名、その他・不明は12名であった。保育士希望者の2名は、大学でのカリキュラムとは別に独自に保育士試験を受験し保育士を目指しているということであった。幼小コースにおいても「その他」と回答した12名は事務職などへの就職を希望しているものが大半を占めた。幼小コースの学生は、幼稚園免許の取得を目指すものの、実際には小学校教諭として働きたいと希望する者が多いことが特徴だと言える。

(2) 学生の持つ保育観の分析

宮本(2008)の分析方法に倣い、コース別に因子分析を行い、それぞれのコースの学生のもつ保育観の因子構造を明らかにする。

1) 幼保コース

保育観尺度38項目の平均値、標準偏差の算出

を行った。「幼保コース」においては、フロア効果は見られず、項目19, 21, 24, 28, 37, 38の6項目において天井効果が見られたので、それらを除いた32項目に対して主因子法による因子分析を行った。その結果3因子構造が妥当であると考えられたので、再度3因子を仮定して主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった8項目を除外し、再度因子分析を行った。その後、十分な因子負荷量を示さなかった3項目を除外した。最終的な因子パターンを表2に示す。

第1因子は8項目で構成されており、「幼児はクラスのきまりを守り、他の幼児と協調していこうとする態度が望ましい」、「幼児は園で、自分から進んで活動に参加する態度が望ましい」、「幼児は担任の保育者の指導を素直に聞く態度が必要である」など幼児が協調性や素直さ、活発さを求める内容の項目が高い負荷量を示した。そこで、第1因子を「素直さと積極性」と命名した。

第2因子は、8項目によって構成されており「保育者には、各人それぞれの保育者としてのタイプがある」、「幼児と保育者の信頼関係の上に、よい教育活動が実現する」、「保育職は、社会的に価値のある仕事である」など保育職への根本的な考え方に関する内容の項目が高い負荷量を示した。そこで、「保育職の使命」と命名した。

第3因子は、5項目で構成されており、「幼児は園では担任の保育者を親代わりの存在として接することが大事である」、「幼児は園生活上で大事なことはまず担任の保育者に話すべきである」など幼児に対する養護的な関わりと、保育活動による成果を求める内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「保育者の養護性と保育活動の成果」と命名した。

下位尺度間の関連

大学生の持つ保育観尺度の4つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「素直さと積極性」下位尺度得点(平均3.34, $SD0.49$), 「保育職の使命」下位尺度得点(平均4.09, $SD0.40$), 「保育者の養護性と保育活動の成果」下位尺度得点(平均3.00, $SD0.64$), とした。内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出した。「素直さと積極性」で $\alpha = .80$, 「保育職の使命」で $\alpha = .74$, 「保育者の養護性と保育活

動の成果」で $\alpha = .73$ 、と十分な値が得られた。「幼保コース」の学生の持つ保育観の下位尺度間相関を表3に示す。4つの下位尺度は互いに有意な正の相関を示した。

表3 幼保コース学生の持つ保育観の下位尺度間相関

	素直	使命	養護	平均	SD	α
素直	—	.37**	.54**	3.34	0.49	.80
使命		—	.28**	4.09	0.40	.74
養護			—	3.00	0.64	.73

** : $p < 0.01$

2) 幼小コース

保育観尺度38項目の平均値、標準偏差の算出を行った。「幼小コース」においても、フロア効果は見られず、項目19, 21, 24, 27, 28, 37, 38の7項目において天井効果が見られたので、それらを除いた31項目に対して主因子法による因子分析を行った。その結果4因子構造が妥当であると考えられたので、再度4因子を仮定して主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった7項目を除外し、再度因子分析を行った。その後、十分な因子負荷量を示さなかった1項目を除外した。最終的な因子パターンを表4に示す。

第1因子は6項目で構成されており、「保育者の指導に素直に従う心がけが幼児にとって大きな教育効果が生まれる」、「幼児は保育活動中、保育者の指示どおりに行うことが大切である」、「クラス運営上、他の保育者から非難や指摘をされないようなクラス運営をすべきである」など幼児の行動を上手く扱えるような安定したクラス運営など保育者の指導力を示す内容の項目が高い負荷量を示した。そこで、第1因子を「保育者の指導力」と命名した。

第2因子は、6項目によって構成されており「保育職は社会的に価値のある仕事である」、「保育職は社会と文化、人間の未来に直接関わる公共的使命のある職業である」、「幼児と保育者の信頼関係の上により教育活動が実現する」など「幼保コース」の第2因子と類似した項目であった。そこで、この因子を「幼保コース」と同様に「保育職の使命」と命名した。

第3因子は、4項目で構成されていた。この因子も「幼児は園で自分から進んで活動に参加する態度が望ましい」、「幼児はクラスのきまり

を守り、他の幼児と協調していこうとする態度が望ましい」、など「幼保コース」の第1因子と類似した項目であり、幼児に対して協調性や積極性、活発さなどを求める内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「素直さと積極性」と命名した。

第4因子は7項目で構成されており、「保育者と幼児は親しき中にも毅然たる一線を保つべきである」、「幼児の保育や生活の指導などには、ある程度の厳しさが必要である」、「幼児は保育活動中に挙手の仕方・発言の仕方など、規律のある態度が必要である」など保育活動における規律や保育者の指導方法に関する内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで第4因子を「規律と指導方法」と命名した。

下位尺度間の関連

大学生の持つ保育観尺度の4つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「保育者の指導力」下位尺度得点(平均3.18, SD0.59)、「保育職の使命」下位尺度得点(平均4.01, SD0.52)、「素直さと積極性」下位尺度得点(平均3.58, SD0.67)、「規律と指導方法」下位尺度得点(平均3.53, SD0.56)とした。内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出した。「保育者の指導力」で $\alpha = .81$ 、「保育職の使命」で $\alpha = .80$ 、「素直さと積極性」で $\alpha = .78$ 、「規律と指導方法」で $\alpha = .73$ と十分な値が得られた。学生の持つ保育観の下位尺度間相関を表5に示す。4つの下位尺度は互いに有意な正の相関を示した。

表5 幼小コース学生の持つ保育観の下位尺度間相関

	指導	使命	素直	規律	平均	SD
指導	—	.45**	.53**	.41**	3.18	0.59
使命		—	.34**	.34**	4.01	0.52
素直			—	.43**	3.58	0.67
規律				—	3.53	0.56

** : $p < 0.01$

考 察

幼保コース学生の保育観の構造としては、第1因子「素直さと積極性」、第2因子「保育職の使命」、第3因子「保育者の養護性と保育活動の成果」があることが明らかになった。また、幼小コースの学生では、第1因子「保育者の指導力」、第2因子「保育職の使命」、第3因子「素直さと積極性」、第4因子「規律と指導方法」

という構造が明らかになった。幼保コースと幼小コースの結果を比較し、幼稚園教諭や保育士を目指して保育者養成校で学ぶ学生の持つ保育観として以下の3点が考えられる。

(1) 素直さや積極性を幼児に求める

幼保、幼小コース双方の結果に、項目6、項目11、項目9が挙げられ、幼保コース学生も幼小コース学生も幼児に対して素直さや積極性を求めていることが明らかになった。素直であることや積極的であることは、教育や保育を行うものであれば少なからず願う子どもの姿であるのかもしれない。しかし、佐藤・七木田(2007)の結果では、幼稚園教諭免許に小学校教諭免許を併せ持つものだけが幼児に「指導を素直に聞く態度」を求めている。幼稚園教諭免許と保育士資格を取得するために養成校において学んでいる学生は、今現在は「素直な」子どもであることに価値を置きながらも、今後、日々の保育実践の積み重ねにより次第に保育観を変化させ、必ずしも「素直な」子どもでなくてはならないとは考えなくなるのかもしれない。

(2) 養護性への理解

幼保コースの学生の結果には、「幼児は園では担任保育者を親代わりの存在として、接することが大事である」という項目14が挙げられた。幼保コースの学生は、保育所実習の中で、基本的生活習慣の確立を目指した養護的な関わりなどから保育者と乳幼児の間に存在する信頼関係に気づき、そのことを保育者が「親代わり」的な存在であると感じたのかもしれない。一方、幼小コースで学ぶ学生も幼稚園での観察実習を経験しているが、保育者を「親代わり」というように捉えたものは少なかった。それは、幼稚園では保育所ほど養護的なかわりが見られなかったのかもしれないし、或いは幼小コースの学生は、養護的な側面よりも教育的な側面に着目していたことも考えられる。ただ、松永ら(2002)は、保育実習後の学生には「母親がわり」などの情緒的な保育観がみられなかったことを報告している。松永らの研究では保育実習Ⅰ・Ⅱを全て修了した3年次生を対象とした調査であることから、幼保コースの学生も保育実習での経験をより蓄積させることで、保育者を「親代わり」という捉え方を変化させるようになるのかもしれない。このことから、幼小コースの学生よりも幼保コースの学生の方が、保育者という仕事を「優しい」や「母親代わり」という情緒的なイメージで捉えているというこ

とも考えられる。

(3) 保育実践は思うようにはいかない行為

幼小コースの学生からは、項目2「保育の進め方は指導書を参考にする」や項目29「効率的な保育の方法を身につける」など保育方法に関する項目が挙げられたのに対して、幼保コースの学生の結果では、それらの項目は見られなかった。保育実践においても幼児への指導方法は重要であり、保育者は日々の試行錯誤を通してよい指導方法をみつけようとしている。しかし、学生にとってはまず「～したらこうなった」という自らの保育活動の結果が重要なこととして捉えられたと思われる。一方でそれは、保育実践が臨機応変な関わりが求められ、またこれと決まった指導方法がないものだとすることを学生が感じたとも考えられる。保育実践を進める上でのクラス全体に対する言葉かけは、経験の少ない学生にとっては乳幼児の反応を予想することすら困難である。1回目の保育実習を終えた学生にとっては、幼児への指導は「思うようにはいかない」ものだとすることを経験したと思われる。幼保コースの学生は、まだ漠然とした感覚でしか保育実践を捉えられていないだろう。しかし、「保育は思うようにはいかない」ということを経験したからこそ、単純に「指導書を参考に」すればいいとは考えられなかったのではないだろうか。

おわりに

本研究では、目指す免許資格の異なる大学2年次生に対して保育観に関する調査を行った。その結果、幼稚園教諭免許と保育士資格の取得を目指す学生は、小学校教諭免許と幼稚園教諭免許の取得を目指す学生とは異なる保育観を持っていることが考えられた。これは、大学での講義や実習での経験の影響、また希望する職種によって異なった資質の傾向があることも考えられる。今後は、保育者を目指す学生や、現職保育者の中にどのような保育に対する捉え方があり、それがどのような経験に基づくものかということ、より詳細に検討する必要があると思われる。

引用文献

- 赤塚徳郎・森楸・大元千種・福井敏雄(1981)
保育者の行動特性と幼児の集団行動との関連。広島大学教育学部紀要、第1部、30、

- 堀憲一郎 (2006) 保育専攻学生はどのような保育観を持っているのか 下関短期大学紀要, 24, 25-41.
- 藤崎真知代・熊谷真弓・藤永保 (1985) 保育者の保育経験と保育観に関する研究Ⅰ. 発達研究, 1, 23-39.
- 藤崎真知代・熊谷真弓・藤永保 (1986) 保育者の保育経験と保育観に関する研究Ⅱ. 発達研究, 2, 17-58.
- 河村茂雄 (1995) 教師特有のピリーフと児童の学級適応についての考察. 日本教育審理学会第37回総会発表論文集, 535.
- 松永しのぶ・坪井寿子・田中奈緒子・伊藤嘉奈子 (2002) 保育実習が学生の子ども観, 保育士観におよぼす影響. 鎌倉女子大学紀要, 9, 23-33.
- 三木知子・桜井茂男 (1998) 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響 教育心理学研究, 46 (2), 203-211.
- 宮本政子 (2008) 乳幼児を養育する母親および父親の育児支援に関する研究—育児ストレス構造の特徴と対処行動との関連—. 小児保健研究, 65 (5), 729-737.
- 森林・植田ひとみ・大元千種・西田忠男・湯川秀樹 (1986) 保育者の指導意識の比較—経験・意欲・指導タイプ別考察—. 幼年教育研究年報, 11, 13-23.
- 森林・大元千種・西田忠男・植田ひとみ (1985) 幼児教育における指導法と保育イデオロギー, 広島大学教育学部紀要第1部, 33, 87-96.
- 邨橋雅広・鍛冶則世・浅川潔司・横川和章 (1989) 幼稚園教諭の保育観に関する研究 (1). 日本保育学会大会発表論文抄録, (42), 722-723.
- 中 俊博 (1996) 保育者の保育観—幼稚園と保育所の比較からみた—. 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 6, 129-141.
- 中村多見 (2006) 保育学生の保育観 (1) —保育者効力感の発達— 高松大学紀要, 45, 197-206.
- 佐藤智恵・七木田敦 (2007) 幼稚園教諭の Belief に関する研究: 小学校教員との比較から広島大学大学院教育学研究科紀要. 第三部, 教育人間科学関連領域, (56), 333-

- ¹⁾ 保育者の Belief とは, 森・植田・大元・西田・湯川 (1986) が, 保育観や子ども観, 指導観, イデオロギー, またその背景となる人間観などを総称して呼んだ。
- ²⁾ 2つのコース分けについては2年次に学生の希望により行われる。幼保コースと幼小コースでの履修科目は異なっている。例えば「保育内容」に関する科目には, 保育内容の研究 (健康), 保育内容の研究 (人間関係), 保育内容の研究 (環境), 保育内容の研究 (言葉), 保育内容の研究 (音楽表現), 保育内容の研究 (造形表現), 保育内容の研究 (身体表現) の7科目があり, 幼保コースの学生ではこの全てを履修しなければならない。一方, 幼小コースの学生の場合は, このうちの4科目を履修すればよい (ただし, 幼小コースの学生においても幼稚園教諭になることを希望するものは全て履修しなければならない)。実習での違いは, 幼保コースの学生は参加実習であるのに対し, 幼小コースの学生は観察実習である。この大きな違いは, 参加実習では, 実際に部分実習を行ったり保育日誌や指導案についても担当保育者から指導を受けるのに対して, 観察実習では, 保育実践を観察することが大きな目的となっていることである。幼保コースで保育実習Ⅰを履修した学生は, その後3年次に保育実習Ⅱか保育実習Ⅲを選択履修することとなっている。一方, 幼稚園観察実習には幼小コースの全員が参加し, その後, 幼小コースの中で小学校教諭を目指すものは小学校教育実習, 幼稚園教諭を目指すものは幼稚園実習をそれぞれ3年次に行う。

表2 幼保コース学生の保育観構造

項目内容	因子負荷量			
	I	II	III	
10. 幼児はクラスのきまりを守り、他の幼児と協調していこうとする態度が望ましい	.73	.14	-.09	
9. 幼児は園で、自分から進んで活動に、参加する態度が望ましい	.63	.07	-.02	
11. 幼児は担任の保育者の指導を、素直に聞く態度が必要である	.60	-.11	.25	
8. 幼児は自分だけが伸びる・進むことを考えるのではなく、クラスの友達全体を考えて行動すべきである	.57	-.09	-.07	
16. 幼児は保育活動中、保育者の指示どおりに行うことが必要である	.54	.01	.22	
7. 忘れ物の多い幼児は、意欲に欠ける幼児が多い	.52	-.09	-.04	
5. 幼児は園生活を通して、集団のきまり・社会のきまりを、身につけなければならない	.39	.29	.00	
6. 幼児は、どの保育者の言うことも、素直に聞くべきである	.37	-.13	.25	
27. 保育者には、各人それぞれの保育者としてのタイプがある	-.27	.71	.15	
32. 幼児と保育者の信頼関係の上に、よい教育活動が実現する	-.12	.63	-.01	
35. 保育職は、社会的に価値のある仕事である	.22	.58	-.15	
30. 保育の理論よりも、実践に基づいた経験が、保育を行う際の一番の力になる	.05	.47	-.33	
20. クラス運営は、クラス集団の全体の向上が基本である	.04	.45	.11	
34. 保育職は、社会と文化、人間の未来に直接関わる、公共的使命のある職業である	.26	.44	.00	
26. 保育者と幼児は、親しき中にも、毅然たる一線を保つべきである	-.12	.44	.23	
22. 幼児の保育や生活の指導などには、ある程度の厳しさが必要である	.04	.39	.08	
14. 幼児は園では、担任の保育者を親代わりの存在として、接することが大事である	-.11	.10	.76	
13. 幼児は、園生活上で大事なことは、まず担任の保育者に話すべきである	.00	-.06	.60	
17. 保育者の指導に素直に従う心がけが、幼児にとって大きな教育効果が生まれる	.09	.10	.59	
18. 問題のある幼児、難しいクラスは、ベテランの保育者が担当することが必要である	.05	.06	.44	
15. 幼児は保育活動中に、挙手の仕方・発言の仕方など、規律のある態度が必要である	.33	-.06	.36	
	因子間相関	I	II	III
	I	—	.43	.51
	II		—	.26
	III			—

表4 幼小コース学生の保育観構造

項目内容	因子負荷量			
	I	II	III	IV
17. 保育者の指導に素直に従う心がけが、幼児にとって大きな教育効果が生まれる	.79	.07	.05	-.16
16. 幼児は保育活動中、保育者の指示どおりに行う必要がある	.68	.02	.03	-.14
23. クラス運営上、他の保育者から批難や指摘をされないようなクラス運営をすべきである	.44	-.06	.05	.18
31. 保育者の力量は、保育経験年数に、ほぼ比例する	.42	.17	.01	-.11
12. 幼児は年齢別での活動では、クラス活動時以上の、規律ある行動をする必要がある	.39	.05	.07	.09
13. 幼児は、園生活上で大事なことは、まず担任の保育者に話すべきである	.39	.14	-.11	.27
35. 保育職は、社会的に価値のある仕事である	.06	.78	-.11	.10
34. 保育職は、社会と文化、人間の未来に直接関わる、公共的使命のある職業である	.11	.74	-.06	-.09
32. 幼児と保育者の信頼関係の上に、よい教育活動が実現する	-.17	.68	.19	-.04
33. 幼児の活動の成果は、その能力よりも、努力の質と量に関係が大きい	.23	.43	-.01	.12
30. 保育の理論よりも、実践に基づいた経験が、保育を行う際の一番の力になる	.27	.42	-.05	-.01
20. クラス運営は、クラス集団の全体の向上が基本である	.00	.35	.27	.10
9. 幼児は園で、自分から進んで活動に、参加する態度が望ましい	-.05	.05	.87	-.14
10. 幼児はクラスのきまりを守り、他の幼児と協調していこうとする態度が望ましい	.05	.04	.82	-.13
11. 幼児は担任の保育者の指導を、素直に聞く態度が必要である	.23	-.08	.60	.08
6. 幼児は、どの保育者の言うことも、素直に聞くべきである	.35	-.10	.36	-.03
26. 保育者と幼児は、親しき中にも、毅然たる一線を保つべきである	-.10	-.02	-.16	.72
22. 幼児の保育や生活の指導などには、ある程度の厳しさが必要である	-.37	.15	.14	.60
15. 幼児は保育活動中に、挙手の仕方・発言の仕方など、規律のある態度が必要である	.32	-.16	-.02	.59
29. 保育者は、教えなければならない内容が多いので、効率的な保育の方法を身につける必要がある	.12	.12	.02	.48
2. 保育者は、年間の保育の進め方の大枠は、指導書を参考にすべきである	.04	-.03	-.17	.44
8. 幼児は自分だけが伸びる・進むことを考えるのではなく、クラスの友達全体を考えて行動すべきである	.14	-.12	.36	.41
25. 保育に対する保育者の熱意は、必ず幼児に伝わるものである	-.11	.08	.17	.40
因子間相関	I	II	III	IV
I	—	.29	.48	.48
II		—	.30	.29
III			—	.48
IV				—

表1 質問項目の内容

質問項目
1. 保育者はその指示によって、クラスの幼児に規律ある行動をさせる必要がある
2. 保育者は、年間の保育の進め方の大枠は、指導書を参考にすべきである
3. 保育者は、親に見せる幼児の客観的な評価を取り入れることが必要である
4. 保育者にとって、保育実践上一番大事なものは、保育技術よりも保育者の人間性である
5. 幼児は園生活を通して、集団のきまり・社会のきまりを、身につけなければならない
6. 幼児は、どの保育者の言うことも、素直に聞くべきである
7. 忘れ物の多い幼児は、意欲に欠ける幼児が多い
8. 幼児は自分だけが伸びる・進むことを考えるのではなく、クラスの友達全体を考えて行動すべきである
9. 幼児は園で、自分から進んで活動に、参加する態度が望ましい
10. 幼児はクラスのきまりを守り、他の幼児と協調していこうとする態度が望ましい
11. 幼児は担任の保育者の指導を、素直に聞く態度が必要である
12. 幼児は年齢別での活動では、クラス活動時以上の、規律ある行動をする必要がある
13. 幼児は、園生活上で大事なことは、まず担任の保育者に話すべきである
14. 幼児は園では、担任の保育者を親代わりの存在として、接することが大事である
15. 幼児は保育活動中に、挙手の仕方・発言の仕方など、規律のある態度が必要である
16. 幼児は保育活動中、保育者の指示どおりに行うことが必要である
17. 保育者の指導に素直に従う心がけが、幼児にとって大きな教育効果が生まれる
18. 問題のある幼児、難しいクラスは、ベテランの保育者が担当することが必要である
19. 幼児は明るく元気に、園生活を送ることが大事である
20. クラス運営は、クラス集団の全体の向上が基本である
21. 保育者は園の保育方針・日々の保育活動を、保護者会などを通して、保護者に説明することが大事である
22. 幼児の保育や生活の指導などには、ある程度の厳しさが必要である
23. クラス運営上、他の保育者から批難や指摘をされないようなクラス運営をすべきである
24. 担任するクラスに対する保育者の責任は、とても大きい
25. 保育に対する保育者の熱意は、必ず幼児に伝わるものである
26. 保育者と幼児は、親しき中にも、毅然たる一線を保つべきである
27. 保育者には、各人それぞれの保育者としてのタイプがある
28. 園内研修などで、よりよい保育の方法を追及し、身につけることは、保育活動を続ける上で、とても大事である
29. 保育者は、教えなければならない内容が多いので、効率的な保育の方法を身につける必要がある
30. 保育の理論よりも、実践に基づいた経験が、保育を行う際の一番の力になる
31. 保育者の力量は、保育経験年数に、ほぼ比例する
32. 幼児と保育者の信頼関係の上に、よい教育活動が実現する
33. 幼児の活動の成果は、その能力よりも、努力の質と量に関係が大きい
34. 保育職は、社会と文化、人間の未来に直接関わる、公共的使命のある職業である
35. 保育職は、社会的に価値のある仕事である
36. 保育者は、少なくとも園では、聖職者の役割を期待されている
37. 保育職は、やりがいのある職業である
38. 保育職は、幼児に接する喜びのある仕事である